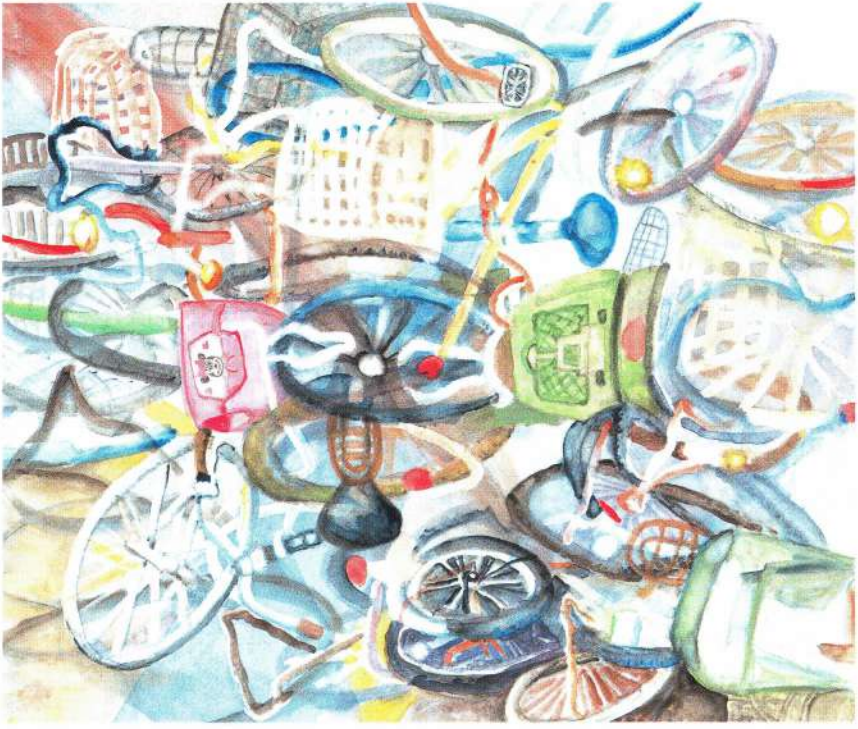
村野次郎創刊

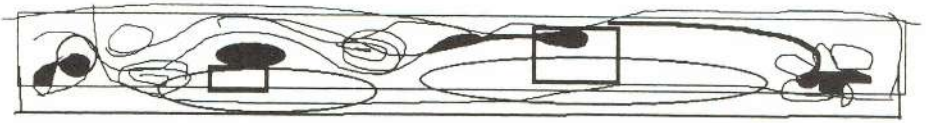
香蘭



2020年（令和２年）１月号

第 97 巻　　第 1 号　　通巻 1069 号

二〇二〇年（令和2年）一月一日発行（毎月一回一日発行）　香蘭　第九十七巻第一号



香　　蘭

2020年（令和２年）１月号
第97巻　第１号　通巻1069号

目　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（53）……土井　紘二郎……表二
作品一特選……鈴木（桂）・石井・坪倉・伊藤（美）・水本・西野・飯島・土井・長野……2
作品二、三特選（十一月号）……江口・岡野・中村（か）・牧田・松沢・武藤・河野・小林（純）・庄司・竹本・中村（陽）・安田・渡邉（典）……4
作品
一……6
二……22
三……31
推薦香蘭集……39
香蘭集……40
社告（昇格）……18
村野次郎への旅（118）……千々和　久幸……20
歌の生まれる場所（84）……鈴木　知良……30
七首抄（十一月号）……柏原（陽）・水谷・中島（紘）・原（礼）……38
エッセイ・自由研究　吉井勇と瀬戸内海の島々……小林　ますみ……44
エッセイ・自由研究　古事記に見る歌謡の役割……近藤　純……46
焦点（十一月号）静かな日々の動きを捉えて……今村　すま子……48
作品一特選欄評（十一月号）……丸山　三枝子……50
作品評（十一月号）作品一……伊藤　美恵子……52
作品二……鈴木　桂子……54
作品三……小林　純子……56
香蘭集……本田　民子……58
緑地帯……宮原・中井（寛）・谷本・阿部（容）・長野……60
明宝研究会第一一二回十月例会……石井　雅子……64
文法あれこれ（8）……田端　明……68
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向……70
他誌拝見　109……青山　侑市……72
歌会及び会合・会員消息・他……73
編集後記・新宿日記……78・表三
表紙絵……中村　陽子「重なり合って」　目次・緑地帯カット……和田　和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（53）

あてどなきあくがれかなしあはあはと
今日も消(け)のこる夕明(ゆふあか)り空

『樗風集』

土井　紘二郎

昭和三年「夕明り空」と題する一首目の歌。先生三十四歳という若い時の作品である。

一読し、とてもなめらかで気持ちよく口誦できる歌として心に残る。人生の上り坂にさしかかった頃の、将来の漠然とした不安、期待、あくなき憧憬など混然と渦巻く自らの心境を「あてどなきあくがれかなし」と詠って共感を呼ぶ。

年譜を見ると、この作の四年前、三十歳で最初の伴侶を亡くされている。三十代の独り身の時代で、歌人としても大きな節目の時代であった。

歌のことばは、あくまで平明でやわらかく、どこかに哀愁の気配が漂っており、読む者の心にしっとりと届いてくる。そして「あはあはと」、また結句の「夕明り空」ということばの美しさに惹かれるのである。

（短歌新聞社文庫『樗風集』106頁、『村野次郎三百首』24頁に所収）

四選者の作品

がらんと寒き　　平塚　千々和　久幸

電器屋が酒屋が靴屋が廃業しがらんと寒き冬に入りゆく
「大君の屁にこそ死なめ」家持めっ、またパソコンが固まりやがって
米五キロ買い来しほかに何ごともなさず勤労感謝の日暮る
気紛れに寄れる酒場のカウンターただいまママと流しとわたし
屋根飛ばし電柱倒せし台風にも相応の言い分あると思うよ
部屋中の灯りあかあか点け放ち酒を飲みおりさみしき夜は
酔えば足る酒ゆえピッチが早くなる明日のことなど誰も解らぬ
振り向けどだあれも居ない身の寒さ一人となれど行かねばならず

ヤブカラシ　　東京　桜井　京子

あの坂をのぼれば海が見えるはずコキアの丘に秋が来てゐる
革命の狼煙はみえず　野にみちて曼珠沙華咲けば立ちつくしたり
バス停のフェンスに絡まるヤブカラシ小ぎれいな花咲かせてゐるが
壁ぞひに屋根までのぼり今咲いておかねばといふかへブンリーブルー
ひとりではもう起きられず台風が倒していつたユリノキである
きぬぎぬの昔恋しも露に濡れあさの月草摘みてもどりぬ
合鍵を確かにもらつた気がするがどこへゆきしか夢の続きに
いつかわが運命の日の来るものかディズニーランドは今日も明るい

のどかに暮れぬ　　横浜　渡辺　礼比子

ただでさえ透る声だと諌められ息潜めつつ歩む病廊
生まれ子の胸板厚きことなどもラガーマンなりし父よろこばす
みどり児とその母ねむる病院の四階の窓明かり落とせり
あかつきを鳴くは鴉か猫の子かはたや我が家に授かりし稚
いつしかに両の眉毛の生えそろう赤子の不思議をながめて飽かず
竿二本足して干し出す濯ぎ物まっさらの汝れを包まんがため
大吟醸「初孫」でんと床の間に据えたり　こうしてみたかったんだ
たいちゃんがおっぱいのんでねんねして秋の一日のどかに暮れぬ

平凡に　　鎌倉　香山　静子

レトリックも比喩も遠退き秋風の音を聞きつつ只々眠い
台風に備へて窓にテープ貼るわれに婿殿「ユニオンジャックに」
台風の接近を危ぶみゐるわれに届ける紫のぶだうピオーネ
台風は事も無げに去りゆけり大きな災害を残したるまま
秋明菊はすつくと一本庭に立つ秋の訪れ告げゐるごとく
老い父より享けたるものは何ならん「平家物語は声に出して読め」
テレーズ・デスケィルウのやうには生きられずただ平凡に日々を過ごせる
神に凭らず熱烈な仏教徒にもなれず代り映えせぬ短歌を詠みつぐ

作品一特選

（五選者共選）

老木　西宮　鈴木桂子

老木の桜一本残さるるあへぐがごとく夏の更地に
めづらしく長兄から電話　るす電に大きため息一つ残れる
生きてわれ何なして来しこれの世に幸せさうには見えぬ二人子
幾度も〈こころ折れさう〉子の言ふを折れてゐたのだとあとに気付けり
あなただけいつも幸せさうだつた〈さういふ人〉とわれを子ら言ふ
明らかに〈いぢめはあつた〉されどまた自死との因果不明とさるる
秋の日をあびて真昼の街上にめざむるばかり金の木犀

秋冷　習志野　石井雅子

指までも乾いてゐるか入所時の指認証のやり直しをする
病室に次つぎと来る友人に妻のわたしはヤキモチを焼く
無防備で頼りなさ気に見えるらし子が家にきて説教をする
秋冷の十月の朝に百日紅鮮やかに咲く道を歩めり
ロシアより来しセイウチは千葉に死す九十センチの牙を残して
この三月独り居の家に秋は来てしみじみ味はう人生の秋
台風の被害がつづく列島に即位の礼は何を寿ぐ

法名ならず　ふじみ野　坪倉寛

十六歳の少女のスピーチ思ひつつ台風の目のドーナツ見てる
十六歳が心配してる五十年後トランプも習も安倍もあの世だ
後戻り出来ぬ暮らしに浸りをり誰かが何とかしてくれるだろ
籾殻焼くにほひの似合ふ日暮れなりとほき故郷の祭りもちかし
秋祭りを明日に控へて掘りごたつ出すのは子供の仕事にありき
何時からか掘り炬燵用の半畳の畳のあらぬ実家となりぬ
法名ならず西澤みつぎを墓誌にみる敬愛の師の集大成ぞ

只今参上　川崎伊藤美恵子

耳もとを風がよいしょと吹いてゆく　わたしを吹いてく風だもんなあ
きみがシャツ衿のかすかにもすり切れて遠い真夏の思い出帰る
ここにもまた雨宮雅子とテレーズ・デスケルー思う人あり季刊歌誌「晶」
スズメバチ四、五日前から庭を飛ぶ　蜂は働くわれは草刈る
校門前太陽文具店閉店す看板猫の其の後も知らず
グランドゴルフにわが打つ球は明後日へ鴉あああ鳴いてくれたり
大方は実の赤らめる柿の木に只今参上ヒヨのひと声

からす揚羽

倉敷　水本　美恵子

古典読めとすすめくれたる昔ありわれのめぐりの人若かりし
二段とびして追ひ越しし若者と同じ電車にのりて押さるる
思ひ草咲く庭すみのひとところ尾花は風にさやさやとして
青柿の音なく落ちる木下闇からす揚羽が舞ひ上がりゆく
その夫を葬りし人がしみじみと走り逝きしと電話してくる
柔道も空手の段位もせかせかとかなぐり捨てて逝きし人はも
名も知らぬ人の歌集がつと届く有難きもあり有難くもなし

程のよさ

東京　西野　美智代

加筆されし定家の青墨際やかにわかむらさきの帖が目覚める
温暖化を糺す少女の刺すやうな視線に怯む巨躯のトランプ
お湿りと祖母の言ひにし程のよさ自然の怒りが洪水になる
体育館に避難の体力なきわれら家の二階を結論とする
増水の岸にマイクを持つて立つ彼にも案じる妻や子をらん
鮮やかな鎌切ひよいと靴にのり跛行に付合ひわが家まで来る
痛む脚なだめすかして投函す歩数計には0歩と出たり

金盥おく

川崎　飯島　智恵子

お隣りの甘柿わが家の塀ぎわに転がりくれどまだまだ青い
放りあげし靴で天気を言いあてた「想定外」などなかった頃は
雨漏りのする天井を見上げつつ何故か楽しい金盥おく
しきり言う不要不急の外出はさけていますよ言われぬまでも
周囲から叱られるまえにあっさりと辞めてしまった退き際のよさ
予告なくバトン渡され「急行に飛びのったような」とは後任の弁
罵られ罵りかえしたわが顔が浮かびなかなか眠りにつけぬ

うろこ雲

東京　土井　紘二郎

彼岸会の本堂出でて見上ぐれば空一面にうろこ雲うく
石神井川に沿ひて歩める夕まぐれ金木犀が塀にこぼるる
本当にやりたいことは何なのか　焼酎二杯でほろほろ酔ひぬ
明け方のこむらがへりに悶絶す日常の怠慢責めらるるごと
戦力外通告うけし幾人の選手の記事が小さくありぬ
ＥＮＥＯＳが隣のＳＨＥＬＬをのみこんでガソリン三円上がつてしまふ
玉砂利を踏みゆく先に鎮もれる武蔵野陵に昭和を偲ぶ

台風前後

横浜　長野　道子

霧雨に傘をささずに髪濡らしホームセンターに電池買いにゆく
スーパーのレジの行列混み合いて台風の備えに気力つかいぬ
ＣＴの検査結果待つ七日目に避難勧告　台風来たり
台風の前につみたるサンシャインマスカット台風の後に届きぬ
青年に「遅れまして」と渡されしクール便の箱はサンシャインマスカット
宅配の倉庫に二日過ごしたる薄皮のなかのサンシャインマスカット
ＣＴの画像に映りゆがみたるわたしの臓器笑えるごとし

作品二、三特選

（十一月号作品から）　千々和　久幸　選

〈作品二〉

母の夏　　柏江口絹代

ドジ犬のタローがいつも飛び越せぬ溝がふさがりタロー行方不明
ぬばたまの黒の錦紗の羽織着て新橋歩きし人は母なり
躁鬱を繰り返す母電話口であら、そう、ははは と笑う今夏は
飼い猫に噛まれし指に絆創膏を付けて名もなき夫の老後
手賀沼の鴆の浮巣のあるあたりおはぐろとんぼが群れて飛びおり

・対象を把握する眼と呼吸の出し入れ、その距離感が良い。

妣の声する　　尾道岡野甫江

利尻富士背に広がれる湿原はエゾカンザウの黄なる明るさ
利尻富士海に浮かべる夏霞カッコーの声遠くに聞こゆ
八月の空に響ける蟬の声六日九日十五日は昭和の忌日
散水の先に寄りくる鬼やんま晩夏のひかり羽に透かして
みそ萩の花咲きそめし草の庭「盆の仕度を」と妣の声する

・奇を衒わず輪郭をくきやかに、まっとうに詠んで味わいがある。

黒揚羽　　福岡中村かよ子

木の洞を突然震わせ黒揚羽舞い立ちゆきぬ闇の子のごと
不安という空気を吸って生きる日は黒い揚羽に紋様の無き
忘れものを取りに来たごと蟬の鳴く長雨衝いた一瞬の晴
空中に溺れるような感覚をパニック発作と医師は名付けし
何億年先を思って眠れぬと誰に言おうか生きろゴキブリ

・デモーニッシュで凄味を感じさせる。今後の飛躍が楽しみな作者。

箱根路　　藤沢牧田明子

倒るるも立ち枯るる木々も散らばれる大涌谷の一谷かはく
地上のことは関はりないと白雲が白雲追ひてゆるゆる流る
規制線の向かうに煙りを吐いてる山の神秘は夏陽に射らる
浴衣きて靴を穿きゐる子どもらにどんな令和の混沌が待つ
大波が泡立ちながら崩るるをひとつ記憶と今も抱きぬ

・かつての不熟なフレーズは影を潜め、己の短歌と戦う姿勢が良い。

ロカビリー　　さいたま松沢みどり

吾に今優しきものはあなただけ柔らかく甘きプリンに話す
今日はずいぶん疲れているねと言われおりマスカラ忘れた顔を曝せば
不真面目だなあと感心されて安堵する真面目だったらもう死んでいる
土被りがロカビリーって聞こえたら部長よ昔の踊りを教えて
これ以上頑張れないよ職場への坂に喘いで自転車を漕ぐ
あっけらかんとその身を曝して立ち尽くす鉄塔のように生きられるなら

・今はただ多く詠むこと、さすれば次第に己の作法が身についてくる。

湘南ライン　　東京武藤昭彦

キューポラの消えて遥かな川口を湘南ラインが通過してゆく

虎の皮のこして逝ける人のあり　名も残さずに消えて行かんよ
お前はね核を持ってはいけないと先に持ってる者の言い草
幸四郎・丹波哲郎・吉右衛門　三人目がよし鬼の平蔵

・言いたいことを歌う段階は過ぎた。次はいかに深く彫るか、だ。

〈作品三〉

角のパン屋　　鎌倉　河野慎二

風の日の自死といふべし風鈴の音のこもりて罅割れるかも
風の日に糸を垂れたる釣船のうねりよ夏の沖のうねりよ
平日の正午過ぎには売り切れる角のパン屋の最後の一斤
銀髪の君の聴きゐる籐椅子に今日もひねもす鶯の歌
始発まで飲むしかないさ新宿の午前三時のブルースを聞く

・遅すぎた青春の歌か、遅くやって来た青春か。今を愛しむべし。

遺伝子　　横浜　小林純子

裏切りを赦す術なく八月の石榴となりて紅き口開く
子の埋めし鳥の遺骸も掘り返し造成地には轍ふかぶか
遺伝子の不思議は小さき種にあり黄もくれなゐも何れあさがほ
素顔など晒しとうなし楠木に下がるミノ虫わくらばを着て

・奔放自在に詠める強み、素顔の奥の本物の顔を何処まで曝せるか。

草焼くけむり　　横浜　庄司健造

春の野の草焼くけむり東雲の空へゆっくりのぼりてゆけり
塩分はとるなとるなと言うけれど塩っけがなくて酒が飲めるか
くれぐれの暖簾くぐれば酒瓶にひまわり一輪挿されてありぬ
あさがおの蔓は互いにからまりてあおり運転今日もまたある

・四首目を読めば、「酒の歌人」だけではない作者の力量が知れよう。

百日草　　千葉　竹本幸子

うとうととひと日を過ごし神様のくれた長寿をもて余す母
猛暑にも嵐にも負けぬ百日草かれんな花は案外しぶとい
どこまでも飛行機雲が伸びてゆく夏空ささえる背骨のごとし
九十九里の侵食すすみかの夏の白き砂浜は思い出となる

・着実に前進する作者、いずれの歌も手堅く詠んでいる。

クリムト展　　東京　中村陽子

クリムトの甘美なエロスと死の香りに誘惑されてゾワゾワしたり
クリムトの背徳の絵を人群れにまぎれ見ている犯罪者のように
雑草の葉のギザギザが気にかかるクリムト展を見た帰り道
ぷあぷあと金魚のような息をする酷暑の街が歪んで見える

・写実から抽象へ、更に抽象から写実へ、詩の真実はその先にある。

しなりて寡黙　　行田　安田恵子

梅雨の雨の重さどっぷり背負い込み川辺の柳しなりて寡黙
幾年を防虫剤に痛められ腑抜けにされしタンスの着物
ギザギザの紫蘇の葉かげをおよぎ来しトカゲは昨日のトカゲと同じ
言いそびれ帰り来て食むトマトの種が奥歯にはさまり酸っぱさとれぬ

・短歌が面白くなってきた今、理に即くより放胆に詠むことを。

斜光　　鎌倉　渡邉典子

ゆく夏のゆふべの色をつつむごと月のぼりたり響き幽かに
影黝きみかんの葉群を透きてくる葉月の斜光の窓にするどし
熟れゆくは放心に似て梅雨の夜の机上にオレンジ一顆がかをる
ちちははを送りて幾年いま夫のために魚の身ほぐす夕餉は

・言葉に意匠を凝らすことより、言葉の内実を抉ること。

村野次郎への旅（118）

「ザムボア」と次郎（十一）

千々和　久　幸

前回に引き続いて「ザムボア」第四巻第一號（大正7年1月）を読む。この号の巻頭を飾ったのが、北原白秋の「推讃の辭」である。「香蘭」人の多くが承知の文章だが、煩を厭わず再録しておこう。

北原白秋

大正七年一月一日。北原白秋謹んで河野愼吾、村野次郎兩君の爲めにあらゆる責任と愛とを以て茲に之の推讃の辭をおくる。兩君とも予が元にありて、苦節十年終始一貫して渝らず、而も道の為め永く永く予と共に隠忍自重し、あらゆる艱難と苛酷とに耐へ、遂に今や渾然たる一家の風格を成す。人及び歌の同朋として兩君の今日ある事を見る。予もまた涙流れむとす。茲に兩君の人及び歌を讃へ、改めて紫烟草舎の舎中、及び姉妹結社巡禮詩社の諸同人に披露し、更に日本詩歌壇の諸賢に推薦し、博く世上に之等俊秀なる新歌人の出現を告ぐ。

これが感激屋白秋の、両俊秀へ与えた愛の讃辞である。まさしく感激の涙で書いた推讃という趣であった。白秋という人はひとたびこうと心が決まると、愼吾と次郎に魂が乗り移り、周辺の事情はもう見えなくなる。

次郎が白秋と最初に見えたのは大正三年であり、師弟であった期間は四年ほどでしかない。しかしこれが白秋にかかるともう「苦節十年」であり、「永く永く予と共に隠忍自重」「あらゆる艱難と苛酷とに耐へ」と、殆ど盲目的になる。

白秋の感激はこれでは納まらず、「大正七年一月七日深更、神田万世橋驛上ミカドに於ける紫烟草舎及び巡禮詩社合同の河野村野兩君の推薦祝賀會より帰りて記す」と末尾に注書きのある、「河野村野君に」と題する二頁にわたる文章も収録されている。

河野君、村野君。

君達のこと、ならびに今晩の光榮に満ちわたつた推薦祝賀のこと、その時の嬉しさうな君達のことを思ふと私は何と云つていいかわからない。さうして紫烟草舎や巡禮詩社の諸同人の友愛と眞實とを思うと何と云つていいかわからない。

今夜は楽しかつた。岩佐君の感激に満ちた祝辭も諸同人の私の聲に和した乾杯の萬歳三唱も君達のうれしさうな而もおどおどして思ふやうに述べ得なかつた答辭も饗宴後のストーブの温たまりも皆なの子供げた談笑も私には何もかも嬉しかつた。君達もさぞ嬉しかつた事だと思ふ。

村野君、君は知るまいが、君が帰つてから、また五六人で須田町のレストランで麥酒を一杯づつ飲んだ。河野がすつかり酔つぱらつて、うれしくつてうれしくつてしようがないんだ、何だいべらんめえなぞ云ひ出した。あまり酔つてゐるので、渋谷君が昌平橋まであの寒いのに送つて來た。（中略）

今後は「朱欒」の編輯も凡て君達二人にま

かした事だから、私は安心してゐる。君達は歌の技巧はもう充分だからこれから、いよいよ人間としての個性を磨き、藝術家としての氣品や禮節をいよいよ修めて、まだえらくなつてくれなければならぬ。（中略）

兎に角、草舍での歌の方の事は君達にまかせた今日、私は更に大きくなるために勉強する。さうして絶えず人格的に君達草舍の同人を一つにする事を私の務めとせう。私はそれでよいのだ。

河野、村野兩君。私は非常に嬉しい。さうして君達のおかげで、いよいよ後顧の憂が無くなつた。私は更に先へ先へ邁進する。萬歳。

祝賀会の酔いにまかせての体だが、かえって白秋の本音がよく現れており興味深い。白秋は更地に次々と新たな旗を立てるのは得意だが、この旗をじっくり育て保守する才覚と粘りには乏しい。

組織者（オルガナイザー）であるより、一詩人としての自由の方が優先した。その結果次々と新しい組織を作っては、これを中途で投げ出すという結果になった。

それにしても「村野君、君は知るまいが」には、苦笑を禁じ得ない。この後昭和9年までの白秋と次郎の長い交流は、このような距離間での交流ではなかったか。感激屋で熱情家の白秋と、冷静で合理主義者の次郎の組合わせは、一つの方向に向かって伴走しているときは強力な相乗効果を生むが、一つ歯車が狂えば修復が困難化する危険性を孕んでいたと今なら言える。さてこのような師白秋の熱い眼差に支えられた河野、村野の方の気持はどうだったか。同号に「朱欒復活に際して」と題する河野愼吾、村野次郎連名の文章があるので抄録する。

雁の鳴く寒い葛飾の夜に吾々が集まつてからもう一年餘りにもなる。其間に吾々は隨分種々な事件にも出逢ひ苦しい思ひもした而し決して挫折しなかつた。懐かしい草舍を守つて行きたいと言ふ心ばかりであつた。そして益々固く固く結合した。其内に白秋氏の藝術上の態度に變化が起つて、遂に紫烟草舍は解散さるゝことゝとなつた。そこで吾々は雑誌編輯に經驗淺きに係らず、總ての事務を處理して行かなければならなくなつた。（中略）

雑誌の名に就いても差當り適当な名称が無かつた爲めに、心ならずも『曼陀羅』としたのである。（中略）

以上の事情が次第に進んで顧問なる白秋氏の心に全々添はないものになつてしまつた。白秋氏も甚しく不愉快であつたらしい。そこで斷然顧問を辭任されると言出された。私達の驚は勿論斯の如き理由から、いやしくも師弟の關係を結んだ以上甚だ面白くない事である。斯くして同人協議の結果設立されたのが即ち紫烟草舍で、前の白秋氏が解散されたる舍を其の名称だけ同人が繼承したので勿論實質に於て前のものに返つたと言ふのではない。只、相變らず氏が顧問として監督されるのである。（中略）

吾々は藝術上にも人間としてもよりよき結社でなければならぬ。烏合の勢は頼むに足らない、眞實一路、恒にがつしりと肩を組んで力強く地上を歩まねばならぬ。諸君も吾々の努力を諒として、一層清く美しく且つほがらかに草舍の爲めに御盡力を願いたい。

大正七年一月十日　編輯同人　河野愼吾、村野次郎

この複雑な経緯を理解することは難しい。